
月の復讐者 魔法学園編

klow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の復讐者 魔法学園編

【Zコード】

N3101Q

【作者名】

k1ow

【あらすじ】

幼少期、父によって母を殺され全てを失った少年、クロウ・ナイトサイド。父を殺害する事を生きる糧にする彼が、強くなるため入ったのは…魔法学園。仲間の精霊や友人といつ温もりのある環境で、血で凍てついた目標へ向かっていく…

暗闇の中、俺はどこかを目標として走っていた。いや、どこかじゃない。ただその場所を思い出す事を、心の奥深くで嫌悪しているだけだ。この先に何があるかを知っている。それを意識すると、暗闇は色彩を帯び、風を帯び、よりリアルなデジヤヴになる。

「母さん……父さん！」頂上への石段を2段飛ばしで駆け上がる。（嫌だ……行きたくない……！）今を夢と認識し、結末を知つている俺は、先に進むことを否定した。が夢の俺は止まる事なく、頂上へ駆け上がる。

石段の最後の段に足をかけ、頂上を一望する。石畳に対峙する一組の男女。「父さん！母さん！」そこに駆けていくつと、一歩踏み出した、その時。

父さんは……親父は……あの男は……持つていた大剣を……ゆつくりと振り上げ……

「あああああっ！」薄暗い……明朝の自室。それは、いつもの風景の一片。「……久々……だな……」一段ベッドの上に寝ていて起きると天井に頭を打つため、かがみながら梯子まで歩く。（もつとも下段に寝床はなく、勉強机が押し込められているが。）顔を洗い、ふと壁に掛けられた制服に目をやる。「今日から高等部、か。」「ハムレタスサンドを口に放りこみ、制服に袖を通す。「クラス表の前、混むし……早めに行くか。」忘れ物がないか確認、部屋をでるとガチャリとオートロックがかかる。開かない事を確認して寮をみると、見慣れた後ろ姿が前を歩いていた。「おーい、フーリイ」深い藍色の髪に後ろから声をかけると、ぐるりと振り向いた少女はにっこりと笑った。「クロウ！今日は早いね？」「クラス表の前が混む前に、

な」「一緒にいこ?」「おう」この明るい同級生はフーリイ・ポン・ドレイク。中等部編入の頃、真っ先にクラスの輪に引き込もうしてくれた人物だ。魔力の属性は【水】、基本である水魔術のほか、治癒術、音術もこなす健気な努力家だ。……ってあれ? 居ない? ……

「クロウ? 高等部こいつちだよ?」「…あ…ああ。ちょっと考えて事してた。」中等部へ向かう道を引き返し、フーリイの背中を追つた。

杖と光がモチーフの学園のエンブレムが彫られた校門の先は、予想通り、ぼつぼつとまばらな人がいる程度だった。昇降口に張られたクラス表から、自分の名前を探す。「…………あ。」あつた。D組の一番上。ざつと面子を確認すると、フーリイを始めとする中等部時代の友人の名前もある。「…今年もよろしくね」フーリイが嬉しそうな顔をする。そういう俺も、安堵感で笑みを隠せない。「ああ。よろしくな。」外からしか見たことのなかつた高等部校舎の中を指定されたDの教室へ向かつて歩く。「今年も生徒会やるのか?」「うん一緒にやろうよ!」「か、考えとくよ…」「むー。そう言つ時つて大体考えてないとと思うなあ。生徒会のみんなも寂しがつてると? 帰つておいでのよ。」「…ん…うーん…」中等部の時に引き込まれたが、諸事情で一年で止めた経験がある。雰囲気は明るくて、すごくいい場所なのは知つてゐるのだが。「ま、まあ…誰か立候補がいたら、俺も立候補するよ。」「それつて戦いたいだけじゃないの?」前に回り込んで俺の顔を覗きこんでくる。覗きこまれている俺の顔、題名をつけるなら「THE 図星」。「あー。クロウ図星だね? 直接推薦しけ

やうよ?」「オ、オットキヨウシツハココミタイダナアサツソクハイロウゼフーリイ」「逃げたね…?」フーリイの細められる視線が痛かつた。

顔見知りにある程度挨拶を交わし、廊下側の一番前端に座る。ピカピカの名札には「—D、H.O.・1、」そのしたにクロウ・ナイトサイ

ドと俺のフルネームが、黒文字でお洒落に刻まれていた。父が……いや、もう父ではない、あの男が母を殺してから、義姉の通うこの学園に中等部一年の終わり頃に編入されて、もう一年ちょっと……俺はこの学園に大きく2つの目的があつて通っている。一つ目は、強くなる。かつての英雄であるあの男を殺せるだけの力をつける。そして、二つ目はそれにリンクしているのだが、『ん？ あたしら？』俺の“精神世界”とやらに住んでいる彼女達の願い。『……クロウ… 今日はやたら独り言が多いですよ？』彼女達は、属性、【月】を担う精靈。ある時太陽の精靈に散り散りに封印されてしまった彼女達は、魔力はあるのに使えない俺の魔法をアシストする代わり、俺の精神に住んで俺に他の月の精靈を探して欲しい、という契約をしている。精靈が俺に住む事で俺の目は赤く変色するが（常人なら青、魔力の無い“欠落人”なら黒）、助ける度に俺の扱える魔法が増えていくから、強くなる近道である。現在は四人。約二年前、偶然倒したアンデッド

スタチューという魔物に封印されていた、“満月”のルウナと、“三日月”のクレーセン。中等部、最後の夏休み、フーリイを始めとするクラスの友達といつた海の近く、肝試しをした森の奥でマスター・アリゲートに封印された“水無月”的紫。そしてこの学園の森に住んでいたブレードフェアリーに封印された“神無月”的白。みんな俺の大好きな仲間だ。ルウナの見立てでは、この敷地にあと一人いるらしく、休みの日はだだつ広い学園の敷地をうろうろしている。二年間も探して見つからないが。

「全員いるか？」HRはじめっぞ。」「ふと、新たな担任であろう男の声がした。短髪に無精髭、銀縁メガネという、何というか洒落たスタイル。「出席を……ああ、全員いるわ。全員異常なし。と」「……」中身は適当らしい。「……んー。俺はザックス。【土】の魔力の使い方なら教えてやれる。後は拳法……我流だからおすすめしないけどな。じゃお前ら、順番に言つてけ、一番クロウ・ナイ

トサイド。」突然の指名にドキリとする。「あ……はい」椅子を引き立ち上がる。「属性は?」「……【円】です……」少し抵抗を覚えた。希少かつ強力、過去魔物の長、魔人を討伐したと言われる七英雄の一人で……俺の母親。魔導師、シフォン・ナイトサイドと同じ属性だったからだ。教室の数人がざわつく。「……なるほど。中等部主席……ね……」「剣の腕も多少……我流ですが。」「……?まあ、よし。次」

全員の自己紹介が終わり、それまで聞いてんだか聞いてないんだか分からぬ腕組みをしながら俯く体制だつた。終わる度にまあ、よしと繰り返していたし、寝ていたという事は無いのだろうが……「……じゅる……」「訂正。絶対に寝ていた。「次、役員決めな。委員長副委員長一名。立候補募集。」朝の会話通り、フーリイが手を挙げる。「副委員長希望します」「おー。いいねえ、決まり。副委員長任命。進行バス。」そう言つて座っていた椅子を教卓前から教室端に寄せ、また眠り始めた。フーリイはやや困りながらも、教卓前に立つた。「えつと……中等部の時は推薦も立候補もひつくるめて募集して一人以上いた場合、武闘結界で総当たりつて方法だつたんですけど……」「ん。いいぞそれで。異議のある奴手挙げほらいないからそれで進めてくれねむいおやすみ」何という短い異議募集時間。それから本音がでます先生。「じゃあ……推薦しますね?クロウ君?」「は……え?」すらすらと俺の名前を黒板に書く。もはや異議を受けつけない姿勢。先生より横暴なんじや……「んー……順当だな。主席。いいんじやないか、他に無きや。」余計な事言つた。

寝とけ。「一応、立候補いた
補も……」一応つて何だろ?まあ、居るわけが……「立候補いた
しますわ。」「ボクも立候補で。」「あたしも!」(よつしゃ!)
頭の横にドリルが付いたような金髪の……メリーだったか……そのメリーにくらべやや白がかつた髪の小柄な男子、ジン……机に立てかけた

大剣が大きく、覚えやすかつた。そして、俺が引っ越していく以前
：ルイン村の小さな分校の同級生、ユレイ。中等部の最後、全ての
分校から代表者を決め、本校の主席を交えてトーナメントで試合
する。その交流戦の団体戦決勝まで勝ち上がってきたのが彼女だ。
「立候補三名、推薦一名。武闘結界での戦闘許可をお願いします。
「分かった。次の時間は施設の紹介だから、合わせて役員決めの試
合を行う。…フーリイ、号令。」「起立……礼……着席」

すとすとすとすと。…？」小首を少しだけ傾けるフーリイを、ぽ
かり。「…痛つ」「全く…人が居たからいいものの、順番が違うだ
ろ。」「うーん……そうだけど…」「違いますわね。仮に逆だつた
ら、間違いなく貴方だけでしたわ。」「へ？」突然後ろから声がし
て…立候補者の一人が優雅に立っていた。「私、貴方と戦つてみた
かった…それだけで立候補しましたもの」「……へえ？」「ジンと
は中学が同じで…彼もまた、そういう思考で動く人ですし。」「ピ
ンポイントで俺に敵意剥き出しのユレイは論外…か」鬼が走つて
逃げ出しそうな形相と目が合いそうになり、あわてて目線を戻す。
「そういう事ですわね。」「俺と戦いたいってのは何でだ?」俺の
問い合わせにメリーが笑う。「とぼけないで欲しいですわね。常人ではま
ず見ないその緋色の眼……【月】の魔力とその名前……イレギュラ
ーで…戦わずには居られませんわね。本物か否か…確かめたくて。
「血沸き肉踊る戦いがしたいんだ。」いつの間に近づいてきたのか、
ジンもまた笑っていた。「なんで……こうも戦闘が好きな人達ばつ
かりなんだろ?」…フーリイのぼやきは、チャイムに書き消され
た。

「ここが高等部の武闘結界だ。装備の整備カウンターから仮眠室まで、必要なものなら何でもそろつてゐる。プレパレイショナルームは8部屋だ。そこから直接転送室に行けるようになつてゐるから中等部のより使いやすい。」「へえ……」施設を見回しながら考える。（プレパレイショナルームから直接、つて事は、結界の中で初めて相手の装備が分かるつて事か。今までみたいに装備を見られる事がないから、装備対策のいたぢこにはできないわけか。）今までなら、プレパレイショナルームから転送室まで歩いて行かなければならず、その装備を見て、その相手に相性のいい武器を……じゃあその武器に適した防具を……そんな事をして時間ギリギリまで始まらない事がしあつちゅうだつた。ありがたい変更点だ。「じゃあ、役員決め終わらすか。クロウ、ジン、メリー、コレイの順に1から4番のプレパを使ってくれ。」「はい。」

プレパレイショナルームに行くと、中等部から見慣れた姿見やバッカパッカーがあつた。バックパッカーは、生徒証をかざすと事前に預けた装備を転送してくれる機械だ。当然、まだ何も入れていないついでなので鞄から予備の剣を一本だけバックパッカーに突つ込み、転送。いつもの装備を整えて入つてきたのと反対側に入る。これも見慣れた転送室だ。いつものように死亡予防などの各種魔法がかけられ、切り取られた世界へ転送される。久々のその感覚に、胸が躍つた。

「“十字屋敷”か。こればっかりは中等部と変わらないな。」十字屋敷：東西南北にのびたその名のとおり十字形の屋敷だ。特徴はその広さと、各方角の窓から出られる庭、その中央にある噴水だ。噴水は太い水路から吹き上げており、流れに逆らえば屋敷の地下や別の庭の噴水に移動する事もできる。屋敷自体は噴水の水源がある地

下、一番樂に庭に出られる見通しの良い一階、隠れる所や物が多く、部屋が多い上、窓の無い一階、そして十字の交点にある、四つ全ての庭を見通せる展望台。ここでの戦いのキーは、状況に応じた位置どり。一階は見通しが良い分、相手に目認されやすい。二階は隠れられて有利かと思うが、逆に逃げ場が無さ過ぎる。庭は展望台の絶好的だし、展望台は複数の庭に人がいたらどちらしか狙えず、これもりスクを伴う。地下は噴水を使う奴の通り道なので水中からの奇襲の可能性がある。（どこも一長一短……まあ、”待ち”は無いな。）転送された場所は、一階……庭を見る限り東端だ。剣を軽く握つただけの緩い構えで、中央に向かつ。が、中央にさしかかった時点で目認されたらしい。「「ファイアクラッカー」！」「うお…！」突然の襲撃。咄嗟

に前に飛び込みかわす。《クロウ、左！》「「斬月影衝」！」ルウナの声に体が反応し、左に剣を振り抜く。魔力を込めて鋭く降られた剣は、その三日月形の軌跡を刃に変え、襲撃者を襲う。ルーン流魔法剣術の初步、「斬影衝」の変形だ。が、短射程だが軌道に尾を引く特徴があるクラッカーに阻まれる。「…コレイ…！」ゆつたりとしたした白い魔術ローブ、竜骨のついた炎精両手杖、剥き出しの敵意。「…今日こそ…雪辱を晴らすわッ！」「フレイムチエイサー」！「上等！」「センス・オクトーバー」！お互に武器を強化する魔法をかける。「フレイムチエイサー」は武器の軌道を追いかける火炎弾を発生させる術。「センス・オクトーバー」によつて冷気を帶びた剣で火炎弾を相殺してしまえばいい。「…やあっ！」予想通り、足元を狙つて杖を振つてくる。バックステップで杖をかわし、チエイサーだけを狙う。（…！？）チエイサーが来ない。俺の剣は大きく空を切る。コレイの顔が笑いに歪むのが見えた。「チエイサーをかけたのは……こつち！」「……つあ！」蹴り。ローブに隠れて見えなかつたが、ブーツに鉄板が打ち付けてあるようだ。脇腹に刺さる鈍痛。次にチ

エイサーによる連撃が（……あ。）思つた。チエイサーが蹴りの

軌道を追いかけても、俺を直接蹴つたんじゃ意味ないじゃん。足が俺に当たる、即ちそこで蹴りの軌道が終了する、足甲の長さ分足りなくなるんだから。予想通り、火炎弾は俺に当たる一步手前で消失する。」……あ。「向こうも気づいたらしい。が、もう遅い。」「

「フルムーンバッシュ」！得意の超短射程魔法を放つ。円形の力場が俺の前に出現し、コレイが遠方へ飛ばされる。すかさず魔力を足に纏い猛ダッシュ、追撃。「斬月影衝・集」「斬月影衝・槍」！剣の軌道を変えた二種類の斬月影衝を放ち、ファイニッシュに入る。

「……「月光剣・破」！」大量の魔力を剣に流し込む。濃紫の光が剣を覆う。「らああああつ！」爆音と共に剣を振り下ろす。「……くう……」コレイも体制を立て直し杖で剣を受けるが、到底受けきれるはずもない。杖ごと叩き斬り、ジ・エンド。「……あきらめ……ない……んだから……」死亡判定が下され、結界の外、転送室へ戻される。ここで受けた傷は完全に治療される。（諦めない……か。）交流戦で戦い、勝利して以来ずっとこうだ。まあ、向こうはことじとくケアレスミスで負けて

いる。強い事は確かなのだが。「……あ痛てて……」《一番、クロウ・ナイトサイド》によつて四番、コレイ・ライトが死亡判定を受けました。残り、三人です。』「ちよつ……？」突然のアナウンス。こんなのは聞いてない。（場所こそ言われてないものの……厄介なアナウンスだな。）誰が活動的に動いているかだと、最後の二人になるまで隠れきる戦法をとつていてる奴がいる、なんて事が手に取るようにならざるを得ない。うーん……これは対策をたてないとなるまで隠れきる戦法をとつていてる奴がいる、なんて事が手に取るようにならざるを得ない。うーん……これは対策をたてないとなるまで隠れきる戦法をとつていてる奴がいる、なんて事が手に取るようにならざるを得ない。

「……「呑気だね。」「いや……だつてこれさあ……つてちよつとまで次から次へなんでこうも俺と当たる？！」背後から声をかけてきたのは、ジン。そして更にジンの向こうからも。「狙つてますもの。」「同盟組んでやがるし？！」「戦い慣れている相手同士じゃ意味がありませんもん。」「……はは」「……どうしたのさ？怖じ気づいた？」「いや。こっち五人だし。」「？？？」二人共呆けている。まあ、初対面だしなあ。「……んー」「剣を再び構える。ジ

ンは大剣に中程度の防具、メリーやジンは「ト拳銃の先端にナイフが括り付けてある遠近両方に対応した武器と、重装防具。陣形はタテでジンがメリーやジンを庇う

体制だ。「いつまでもボーッとしてるつもりッ！」ジンが大剣を引き、距離を詰めてくる。「鎧破兜碎撃」！」「鎧打・天」横に大きく振り抜かれる大剣を、両手を添えた鎧で受ける。手首に鈍い痛みが走り、剣が宙に舞うのが視界の隅に映った。とりあえずそのまま倒れ込む様に振り抜かれる大剣をかわし、宙返りの要領で距離を取る。メリーやジンの剣を遠くへ蹴飛ばすのが見えた。「あらー……」「呆気ないなあ。終わり？」「ではないですわよねえ？」人の剣を蹴飛ばしといて笑顔で言わないで欲しい。「いやあ……参った参ったぶつっちゃけどうにかかると思ってたからさ。」「なめられた物ですわね。主席になつて天狗ですか。」「うーん……やっぱ一対一はキツいわ。…………だからさー」「組むな、つて？それは無いね。これで終わりならそれまでさ。」「いやいや、んなこと言わねえよ…………だからよ。一人でやるわって言おうと思って。」「さっきから五人だの一人だの……真面目にやつて下さらない？」…………「精霊憑依：浮脚靴＆桜散鎌」。魔力の充填が終わり、三日月の精霊、クレーセンが俺の身体を一部支配するように憑依する。地面からほんの少し浮く感覚。いつ

の間にか左手に、華奢な見た目の柄に消え入りそうな薄く鋭い刃。服装も袖の無い動きやすい物になつていて。他からみれば一瞬で姿が変わる……変身だ。正直魔力を溜めて居る間、ジンかメリーやジンかが痺れを切らさないかビクビクだった。一人が唖然としているのを見ると、笑いが零れる。「……くつ……つ……くくくつ……」「時間稼ぎ……つ！」『さア、続キと行コうカ！』俺とクレーーセンの声が二重奏を奏でる。軽く細い鎌は、剣より格段に早い攻撃をジンにお見舞いした。肩を抉る一撃に、苦痛に顔が歪む。すかさずメリーやジンが銃弾を撃ち込みながらフォローに入ってきた。ジンも意図を察し、下がる。『お一人共切り替えが早いですね……私を呼ぶのも納得です。

』（二人とも強い…とにかく判断の速さとコンビネーションの質が凄い。）二丁拳銃の銃剣と弾丸の連續攻撃を避けながら打開策をねる。「銃術：アルファ カトレア」！トリガーに指を掛けながら銃を回す連續銃撃。至近距離での攻撃に急所を避けるので精一杯で、右肩に一発、腕に一発、左肩に一発もらつた。その時、リボルバーが回つてい無い事に気がついた。（回らない…魔法銃か。リボルバーは飾り付けの

フェイク…）「メリー！」再び陣形を入れ替わる。邪魔のしにくいベストなタイミングだ。肩に簡易な包帯を施したジンの大剣が再び俺の横をかすめ、床に突き刺さる。床にひびが入り、破片がビシリシと飛ぶ。「……！」「まだまだ！「跳蛇襲碎顎」！」床を離れる反動を利用して、大剣を斜め振り上げてくる。とっさにしゃがんでも髪が何本もぶつた斬られる。憑依の研ぎ澄まされた反射が無ければ間違なく顔から真つ二つだろう。「つしゃあ！」しゃがんだまま鎌を振り上げて一閃。決定打だつた。《ジン・ベルセルクがクロウ・ナイトサイドによって死亡判定を受けました。残り一名です》「まだまだ行くぜっ！」疾駆。俯いていたメリーは顔をあげ、二丁剣銃を構え直した。スケートをするような浮遊状態でのスピンで連續的に鎌での一撃を振るつていく。メリーはその一撃一撃を丁寧に交わし、銃撃を放つてくる。バックステップをしながらの銃撃は狙いが全然定まつてなかつたが、俺の反撃が、始まる。

1章～黒の信念～ №～3「結果」

「うああああつっ！」左右に鎌を振り抜き連撃を放つ。一撃の威力を保持しながら、反撃の隙をとれない。メリーはメリーで、その攻撃の一撃一撃を丁寧に避ける。そうした長い時間の中、一つの問題が発生した。《クロウ！時間が！》（分かってる！）そう…憑依を維持していられる時間は、そこまで長いものではない。しかし、限界があるのはこちらだけではない。「…はあ…はあつ…！」体力と集中力の限界。先ほどから動きが鈍り始め、一つ、また一つと、浅いものではあるが鎌の傷を受けている。そして、もう一つの限界が確実に近づいていた。建物の中でバックステップをし続ければ出てくる、当然の限界。すぐそこまで迫った壁まで押し切り、メリーに逃げる道が無くなつたとあれば、鎌撃を外さない。時間切れか…押し切りか。「つらあ！」一瞬、動きが止まつた。右肩を狙つた一撃は深々と刺さり、メリーが苦痛に顔を歪める。「…ふ」（…！？）その顔が笑みに変わつていた。鎌を引き抜く一瞬の隙。顔面に定められる銃口。「しまつ……」「〔閃光弾〕」銃声と共に視界が真っ白になる。鎌が軽くなり、気配が遠くなる。俺に時間が無いことを分かつっていたのか…視界

が回復した時、メリーは遙か後方…屋敷の中心まで走り抜けていた。（左の銃は音と光で相手の動きを止める代物か。分かればこっちのものだ！）急速ダッシュで距離を詰める。「逃がすかっ！」大きく鎌を引く。「つらあ！」縦に振り下ろし、一撃必殺を狙つたが、難なくかわされ、鎌が床に刺さる。ここまで予想の範囲内だ。素早く鎌の柄を手放し、顔面を狙つたフック。銃で受け止められ、手袋越しに鈍痛が走る。一旦バックステップで距離をとり、鎌を拾う。

彼女はその瞬間を待つていた

「……「榴弾」！」カシャリ、という音の後、床ジンが大剣を、俺が鎌を刺し、脆くなっていたであろうその地面に、黄色の弾丸が飛んできて。

爆発した。床が崩れ、俺は床の瓦礫と共に下へ落ちていった。

「…………つっあ…………」息が漏れる。地下階の床に着地に失敗、足を捻った挙げ句、床にしたたか背中を打った。それだけならまだいい。憑依が解けた独特的の身体の重みと倦怠感で、とても動ける状態じやなかつた。数分もしないうちに、金属製の階段を下りる音がする。万事休す。…………参つた。今度はマジで。」「やはり……その強化魔法は長くは持たないものでございましたか。」「まあな。奥の手の一つだつたんだけど……そのリボルバーが魔法銃の飾り付けだと思つたのが運の尽き、か。」「一つ……と言うのがいささか引っかかりますけれど……確かに貴方はこのリボルバーが回転しない事で即座に魔法銃と見抜いた。これを逆に利用させて頂きましたわ。」「後退し続け、壁が近づき終わりが来ると俺が油断した所でそのリボルバーを回した。引き金が上下で分かれてるとはね……上の引き金はリボルバーを回して弾丸カートリッジを替える物。下の引き金は発射用。そうして弾丸カートリッジを変えて閃光弾を撃つた。ジンの一撃でひびが入つた床まで引き返し、再びカートリッジを変更、榴弾を撃ち込む。俺が気付いたのは最後だつたけどな。」「さて……そろそろ試合終了ですわ。」

「そうだな……」メリーが階段から銃を構える。俺に近づかない慎重な、かつ銃撃を外す事のない位置。バン、という無機質な音と共に、ゲームセットだ。

『クロウ・ナイトサイド』によつて、メリー・グロリアが死亡判定を受けました。実戦演習、終了です。お疲れ様でした。30秒後、転送します…』

「あつははははは、ははははは！」教室に帰り、配られた物やらプリントやらをカバンに詰めたあと、昼飯。今日はこれで帰りだ。「お黙りなさい！最後の最後まで…貴方は！」合わせた机の向かいでメリーガムツとする。「はあ……はあ……あー腹痛え。」「あの短時間で、一発で人を殺すような魔法を唱える量の魔力を溜めるなんて到底無理！一体…一体どうやって！」「簡単さ。俺は魔力が切れて魔法が解けたんじゃない。自分で解除したんだ。」「…な…！」

「当然、一階にあつた鎌は消滅したよな。それを見て、魔力が切れたと思ったお前は、警戒を疎かにし、地下に踏み込んできた。この時、階段の死角…真下に魔法陣が引いてあることにも気づかずに。不用意に降りてこないくらいには注意してたみたいだけどな。それが仇になつた。俺は魔法を発動、真下から撃つて脳天まで貫通。つてことで。」「…ですけど、ならば何であんな所で無防備に寝ていたりしてましたの？それこそ扉の影から襲つたほうが確実でしょう！」「着地の時足捻つちまつたんだ。動けなかつたんだよ。」「言つてゐる事が滅茶苦茶ですわ！なら階段下の魔法陣をどうやって引きましたの！」「…んー

…引いたのは俺じゃないつづーか…」「ハツキリなさい…」「よしわかつた。ハツキリ、教えない。」「…（ブチッ）…」ひょいつ、と、俺の弁当、朝の残り、あと四つのハムレタスサンドの一つからハムとレタスだけを箸で掴んだあと、口に放り込み、にっこりと笑うメリー。お、鬼だ…。「何すんだよー。」「あら…」しばらくむしゃむしゃとしていたメリーの顔が変わる。「美味しいですわねー。

「コレ。」嫌味か。俺は残った物を食われる前に食べるべく、サンドを取り出……せない。空をきる指先。弁当の中のハムレタスサンドは残り一個（とパン2枚）になつてゐる。両手で大事そうに持つて、少しづつかじるよつにハムレタスサンドを食べるフーリイ。ハムスターみたい。一口で全部食べるジン。牛みたい。取りあえず、ぽこ（フーリイに）バキッ（ジンに）と一発ずつ制裁。「今僕だけ凄い音したよね！？絶対力加減違つたよね！？」「全く……お前らのおかずもらうかなな。」ひょい、ひょい、ぱいっ、と。「無視！？しかも僕の所おかずどころか弁当箱ごと無いんだけど！？代わりにクロウのパン2枚が無造作に投げてあるんだけど！？」「」駆走せん。」「早！？弁当箱だけ帰つてきたよ！？ていうか誰にも返事されないんだけど！？」「うるさい（よ）（ですわ）。」「綺麗に三人でハモる。黙り込むジン。ハムレタスサンドの恨み、ココに晴れり。

その日の夕方、委員長、副委員長に就任したメンバーは小ホールに呼ばれ歓迎会がある、との事で、フーリイと総合舎に向かつてゐた。「はあ：ノワール先輩と会つて、気が重いぜ。」「ふふつ。クロウは会長嫌いだもんね。」脳裏にあの笑顔が浮かび上がつた。「はあ！。勘弁してくんねえかな……」「だーめ。権利争奪戦に勝つたんだから。晴れて生徒会のメンバーだよ。」「せめてノワール先輩だけでも避けたいなあ……」中等部一年の時、一年間だけ生徒会に入つた俺にとって、一年生にして三年生を押しのけて会長をやつてのけるイレギュラー、ノワール・ブラッドはトラウマだ。【闇】の魔力を変幻自在にあやつる細剣使い。48戦中、39敗。次元の違う強さだつた。そもそもはいつか勝つ、と胸に決めた、そして休日に月精探し出来ない、だから生徒会を離れた。独学で鍛えた俺は少しでもあの人に近づいたのだろうか。それを少し考えただけで、ブルーになつた。

「でかしたぞ！フーリイ！」入つて早々に声をかけてきたのは、ノワール先輩と真逆、分かりやすい快活明朗な性格、超特攻型【雷】の剣士、ヴァイス・ベイグランド先輩だ。ノワール先輩とペアを組むほど気心が知れている事が理解出来ない。「待つてたゞぐクロウ。生徒会一同、首を長くしてなあ。はつはつは！」相当上機嫌だ。俺はその向こうでにこやかに笑っている人間を見しただけで最悪の状態なのに。「やあ。お帰り、クロウ。君なら帰つてくると思つていたよ。」すらりとした鼻筋。銀縁メガネ。神出鬼没、人の心を読む、勝てる試合で手を抜く、なぜか俺に週一回の試合を強いつてきた…etc…ミステリアスな男。会長椅子から立ち上がり、歩いてくるその腰には、俺が中等部二年生、最後の試合と同じ黒のエストックが下がっている。あの時と同じ……変わつたのは“水無月”紫がいる事くらいか。少なくとも、見ただけで分かるのは。「もうちよつと強くなつてから來たかつたですけどね。俺としては。」「君の成長を見れるだけで嬉しい限りだよ。見ただけでも随分強くなつてるみたいじやないか。」「…………」相変わらず読めない人だ、と思う。外見

が変わる程筋肉を付けた訳ではないし、人の魔力の最大量は本来生まれつき変わらない物だ（俺の場合、月精それぞれが持つてている分の魔力が増加する）。大体魔力が目視出来る人間なんていてたまるか。俺の変化に気づく訳がない。「まあ、確かにそうだね。」「？！？！」でたよ。読心術。どうやら俺の嫌いな部分は健在のようだ。「クロウ。試合しないか。いや……クロウだけじやない。折角総合舎に來てるんだ、大結界を貸し切つて、生徒会全員でバトルロイヤル形式の試合をしよう。それが、僕流の歓迎会だ。」言う事が突發的すぎて面食らつ。一年生で高等部の頂点に立つこの男の奇天烈な言動に、ホールがざわめく。サプリーズ好きな所も変わつてないらしい。まあ、こういう事があると思ったから剣だの何だのを準備してきたわけだが。フーリイもなれている故、同様に両手棍を背

中に下げている。一時期でも生徒会にいたら身につく。“ いつでも戦闘準備しどけ” だ。慌てふためく奴が何人かいる。そして、俺達には次のセリフが読める。「三分後、集合できなかつた奴は遅刻とみなし、この小ホールの片付けをやる。あ、その後ちゃんと大結界に来ること。待つてお

くから。解散」と。やつぱりね。すたすたと大結界に向かう生徒会組と、ダッシュで寮に向かう新参組。走っている奴らを見ると、ちょっと哀れとも思いながら、俺達は大結界に向かつた。

1章～黒の信念～ no.4「全力戦」

俺はいつもの装備に、色々な小道具をいたたいた大きいサイドポーチと剣をもう一本足して、少し気合いを入れた。『……主様……』（？）どうした、紫。）思えば、紫から話しかけてくるのは珍しい。寡黙で人見知りの激しい引っ込み思案な彼女も、少しは慣れてくれているのだろうか。『……ひどい……全部聞こえてる……』（いや……ゴメン。で、どうしたんだ）「……あの人……ノワールって人……私を憑依召喚してほしい……戦うとき……」（……）そう言えば、ルウナやクレーセンも、奴と戦うとき、「違和感がある」とか言っていた。紫もそれを感じているのだろうか。『……ん……お願い……主様。』（OK。いつでもスタンバれるようにな。）『……うん……！』

大結界が選んだフィールドは、普段あまり使わない『大広間』だった。ぶつちやけ、ただ何もない広い正方形の部屋だ。強いて言うなら四力所の扉から、部屋を囲むような廊下があるくらいだ。その廊下の隅に転送された俺は初っぱな悪態をついた。Ｌ字の角から見渡す景色には、左手からフーリイが、右手からヴァイス先輩が一目散にこちらに向かってくる。つぐづぐ運の無い転送場所だ。取りあえずヴァイス先輩の方向に走る。「うおおおお！」大きく剣を振りかぶり、馬鹿正直に真っ直ぐ振り下ろされる剣を最低限のステップで交わし、走り抜ける。広間に続くドアを蹴破り、（ドアの下敷きが一名、死判）「ううわあ……」早くも死屍累々。今も四人ばかりがすっ飛び、それに当たった数名がさらにすっ飛び。そうして「俺の所来るー？」反射だけで切り捨ててしまう。南無三、名前もわからぬただの人A、B、C。君達の悲惨な飛びっぷり、俺は忘れない。『主様！いるッ！10時の方向、15メートル！』（了解ツ！）「精霊憑依・纏衣霧縫&琥珀ノ魔筆」…一瞬の加速感と共に

に、俺の姿が変わる。剣を持たない右手に茶ともオレンジともつかない美し

く巨大な万年筆が現れ、視界がクリアになり、服はゆつたりとした和装になる。動きやすくは無いものの、強固な魔結界を無意識下に張れる纏衣霧縫は魔法を唱える事に特化している。懷に入られると物理的攻撃に對して本当に無防備で、主軸となる琥珀ノ魔筆が非常にクセの強い武器である事が、この状態のネックだろう。琥珀ノ魔筆は魔力を込めている間、ペン先に光が宿り、空中に魔法陣が描ける。本来地面か壁かぐらいしか描けない魔法陣をフリーで描けるのは強みであるものの、抵抗の無い空中に陣を描くと言うのは存外難しい上、魔力を込めている間右腕以外が全く動かせない。正確に陣を描けなければ魔法は発動しないし、他人の魔力を受けると陣は消えてしまう。紫が俺の意志を汲み、最適な魔法陣の描き方を俺に伝え、俺がそれを完璧に描き、紫が解放し、発動する。この連携も大変だ。どこにもミスを許さない。しかし、これほどのデメリットを補うのが、根本にある魔法陣で魔法を発動する、ということだ。紫の知識は膨大で、発動出来ない魔法は無い、と言い切るくらい、そのレパートリーは無限だ。魔法陣なら、発動する属性の魔力である必要はないし、魔力の消費も少ない。超魔法特化型、それが紫との憑依だ。「行くぜ!」

「〔ドロップカッター〕!」「〔サンダーフイスト〕!」細かい水の刃と雷を纏つた手が衝突する。水が分解され、ヴァイス先輩は再び距離を詰めてくる。【水】では【雷】と相性が悪い。かといって腕つ節で勝つ事はまず無理だ。クロウが迷いなく逃げたのは、ヴァイス先輩が角の向こうに居たから。ヴァイス先輩は素早く的を私に切り替えてきた。相性の悪い相手を押し付けられた気分だ。「「ウエーブウォール」!」目の前に水の波を起こし、再び距離を開ける。ヴァイス先輩の剣のリーチに入つたらアウトだ。体内の水魔力が先輩の雷魔力と反応を起こし、大ダメージを受けてしまう。「うーむ。

なかなか距離を詰めさせては貰えない。成長したな。一人とも。」

「そんな、まだまだですよ。」「ははは。謙遜するな。二人は成長

しているぞ。クロウなんかは、すれ違うだけで分かつたくらいにな。

」「ありがとうございます。先輩。」「何、事実を言つてるだけだ。ほら、もう一丁いくぞ！」「つ！」「カーレントランサー」！」「サンダーフィスト」！」渦潮の槍も、あっけなく分解される。しかし、この魔法はそうさせるための物だ。サンダーフィストは水魔力と反応を起こし

た事で効力を失い、次発動出来るまでのリロードタイムができた。

「「ウェーブウォール」連結！「カーレントランサー」」一度に二つの魔法を続けて発動する。出来る人間が数少ないといわれる連結技術。ウェーブウォールで押しやつた相手を追いかけるようにカーレントランサーを放つ。「……ぐつ！」狙い通りの有効打だ。「「トライデント」！」止めどばかりにカーレントランサーの上位魔法、トライデントを放つ。高圧の水流が、先輩のアーマーをぶち抜く。局所的に鉄板を入れるだけの機動力を削ぐ事のないシーフタイプのアーマーでは防御力に欠ける。心臓を貫いた水流がありありと証明していた。死亡判定だ。心に歡喜が湧いてくる。一体一では初勝利だ。しかし、それを噛み締める時間はあまりに短かった。「：「スノーナイフ」……。」「！？」突然、背後からの攻撃。遭遇戦にはよくある連戦だ。前に向かつて飛び込み前転し、転がつた際の一瞬の視界で背後のナイフの位置を把握、起き上がると同時にナイフを見る事なく打ち落とす。後ろを振り向くと、見慣れない少女が片手持ちにしては長く、両手持ちにしては短い…中短杖とよばれるサイズの杖を真つすぐ構え

ている。「：「スノーナイフ」…」「「ドロップカッター」！」「どちらも低威力で数を発射する中距離魔法、ただ、向こうの魔法は若干威力にウエイトを置いているらしい。競り勝つのは……こちらだ！」「…つつ！」切れ味を持った水が相手の頬を掠める。白い肌に赤い線が入る。「…まだまだ」「アイスブレード」…再び向こう

が魔法の体制に入る。先ほどよりふた周り程大きな氷の剣が出現する。この少女は威力と短時間に重点を置いた魔法を多用する【氷】の魔法使いタイプと踏んだ私は、距離を詰め、近距離で攻める選択肢を取つた。後ろに背負つた両手棍を構えながら走る。向こうはこちらの動きに動じる事も無く、氷の剣を正確に狙つてきた。「でも！」片端を持ち、ジャンプと共に大上段から振り下ろす。遠心力と体重の乗つた重撃が氷を粉碎する。「……所詮氷！」ここまで早く高威力の呪文を唱えようとすれば強度が落ちるのは必至！ 左に大きく引き、バットのスイングのよつに振り抜く。「やあああああああ！」

「はあああああつ！」ダッシュで距離を詰めてくるノワール先輩。溜めておいた魔法陣を一気に発動する。「「サークルレーザー」」連結「リフレクバッシュ」連結「ピンホールスナイプ」！」ズキズキと頭が痛む。（三重連結なんてやるもんじやないな。）ノワール先輩がバネを伸ばした様な光線を体を捻る様に交わし、一気に肉薄してくる。エストックがすぐそこまで来た所でリフレクバッシュが発動する。結界から無威力だが相手を押しやるように距離を置く衝撃波が発生し、再び二人との間に大きな距離が生まれる。「嫌な戦法だね。」冷や汗をたらしながらノワール先輩が苦笑する。確実に押してやる！「三つ目……っ！」おおきな円に幾重もの十字の描かれた魔法陣に手をかざし、照準を合わせる。超高威力高弾速で弾道にクセが無く、射程に優れ発動までの時間も短い。一見完璧に見えるが、致命的に有効範囲が狭い。人の小指の第一関節まで位の弾丸一発のみ、という、類い希な狭さだ。超正確な照準を要求するこの魔法を、感覚だけでぶつ放す。なんとも破天荒なやり方だが、それを紫が無意識に修正しているらしい。吹き飛んでいるノワール先輩の左足付け根から右脇腹に向

かつて突き抜ける。すぐさま次の魔法陣の準備に取りかかる。」

はあ……はあ……っ」魔力切れが近い。小さな魔法陣をありつたけ書いて連結するか、大きな魔法陣一つで勝負に出るか。逡巡の末、俺は憑依を解いて魔力を少しではあるが還元した。「「断月闇衝」！」斬月影衝を昇華し、追尾機能を持たせた一撃。刃のサイズも斬月影衝の比ではない。「行け……っ！」

「…………… も、せむれ、靈だら、ねー。」

斬りやがった。実体の無い刃を。

「今のは……はあ……危なかつた。本当に……はあ……強くなつたね……。クロウ。」ピンホールスナイプなどの魔法自体は効いている。なら、なぜ……？「もうそろそろ……頃合いかな。」「……？」「僕が何故、君と戦う事にこだわるのか。気になつては無かつたかい？」これは……好機だ。魔力を練る千載一遇のチャンス。話を聞きながら、集中する。「僕は、君が学園に何をしに来ているのか……知つている。」「そんなの……強くなるために決まつてんじやないか。」「そう。強くなりに来ている。……ある特別な方法によつて。」「……！？」「君は……欠落人だつた。そして今、精霊憑き。違うかい？」「……」「そうすれば、全て合点がいく。突然姿の変わる不思議な魔法。赤い目。月という、世にも珍しい属性。君は、精霊憑きだ。」隠すつもりもない。俺は堂々と叫んだ。「そうだ。あんたの予想は全部当たつてゐる。だからなんだ？」「僕……いや、僕達と勝負だ。」クロウ。「その言い回しに、俺は全てを悟つた。

俺が魔力を練つてゐるのを黙認したのも。

断月闇衝を斬つてのけたのも。
ルウナ達の違和感も。

俺と戦い続けたのも。

全ては彼の立場故。

「僕は……君が今まで倒して來た魔物と同じ……月の精靈を封印する楔だ。改めて僕を倒して、この子達を解放するんだ。君にはその資格がある。」「…………待てよ。」「分かつてゐるさ。この宿命も。だから君の実力を見た。僕も全力でいくよ。」つまりは分かつているのだ。月の精靈を解放した楔が、太陽の精靈によつて、殺される事を。それは、武闘結界と言う絶対の保険が揺らぐ呪い。あまりにもアンフェアだ。「躊躇うな。」今までに見たことの無い、鋭い双眸が俺を射抜いた。「構えるんだ。クロウ。」「…………何でだよ。何でそんな簡単に死ぬ事を許容できんだよ！？」「…………平気な顔して！あんたを信頼してゐる奴が……あんたを必要としている奴が！……どう思うか、考えた事はねえのかよ！？」脳裏に母の顔が浮かぶ。「…………無いわけ無いだろう。両親、同じ町の友人、ヴァイス。僕を信じてくれた人が居るのは確かだ。」「なら……！」「これが僕の信念だからさ。」「…………！？」「月の精靈憑きに全力を賭けて倒され、華々しく人生を終える。僕が死んだ時、それは信念を守つたからだ。そう言つてあるからさ。」「…………つ！」唇を噛む。「そうじや……ねえだろ……」「…………まるで申し合わせたかの様に……同時に剣を、構える。「馬づ鹿野郎がああああ……！」全身全靈を込めた戦いが、始まる。

ガキン！、と、金属同士が合わさる音がする。振り抜いたと思つていた棍は、「それ」に止められていた。「貴方は……勘違いしてゐる……」「それ」は私の棍を押し返し、はじいた。距離を置き、「それ」の正体を見据える。透明で、照明を反射する美しい光をたたえている。「……強度は……出せる……私の氷は……自在……」中短杖から伸ばした、氷。それが刃となり、一つの剣を成してゐた。「近距離戦でも……負けない……！」今度は向こうから距離を詰めてくる。「……せ

「いつ！」「つーやつ！」激しい鍔迫り合いになる。間近で見る少女の顔は何とも綺麗だった。「…D組…フーリイ・ポンドレイクよ…あなた…名前はつ…！？」「…C組…ブラン・シルク。…つ！」筋力はほぼ互角。「…決める…これでつ！」氷剣から、ちらりと小さなナイフがはえてくる。器用だ…凄く。「…つ！」徐々に首に近づく、刃。かといって、棍の力を弱めてしまえば、氷剣に仕留められてしまう。「全部…作戦か…」「…」「すごいや。最初から全部…作戦だつたでしょ。」「…貴方も…凄い…見破つたの…初めて。」そう。魔法に特化しているタイプであるように見せかけ、土壇場で氷剣を出し、鍔迫り

合いに持ち込み、この状況に追い込む。首に氷刃が食い込む。「…また、相手してね。」「…ん。」「でも！」力を込め、体が密着しそうなくらいに近づく。氷の刃はさらに刺さるが、気にしない。「…」「…」「ポセイドンスフィア」！これが、最後の足掻き。道連れだ。

「…くす」「あは。」「一人共死亡判定を受けながら、笑った。良い友人ができそうだった。

「「ダークネスアクセル」！」「「フルムーンドライバー」！」もう何度目か分からぬ衝突。二人の剣がギンギシと鍔迫り合いを起こす。「つらあ！」顔面を蹴り飛ばす。無理な体制で骨が悲鳴を上げるが、構うことなく追撃する。「「狂月嵐斬」！」高速で剣を振るう、左右合わせて12連撃。次々に先輩のアーマーが砕け、下地が裂ける。「しゃあああつ！」最後の一撃で切り抜き、距離を取る。「「イービルフインガー」！」今度はこちらからと言わんばかりに攻撃を仕掛けてくる。威力を秘めた高速の突きに剣では捌ききれず、俺のアーマーもボロボロだった。「…はつ…はあ…」「…はあ…はあ…」

次の一撃で、決まる。

剣技なんて小細工は無し。精靈を憑依する魔力も残っちゃない

「おおおおおおおおおおおお！」

二人の吼号が重なる。互いの全てを賭した、絶対の一撃。

軍配は、俺にあがつた。

今、先輩は大の字で床に倒れている。「」で解放を宣言すれば、全てが終わる。「…………」「…………先輩。」「…もう、語る事はないよ。」もう先輩は腹をくくつていてる。言葉を飲み込み、遂にその単語を発する。「解放」巨大な魔法陣が現れ、くるくると廻る。光の玉が一つ、俺の中に吸い込まれた。「ありがとう。クロウ。月の精靈憑きが君で……良かつた。」「まだだぜ。」遙か上空を見据える。役目を果たせなかつた楔を焼き殺す、不条理な光線。軌道は見えている。……る事は至極簡単だ。「何を……止せ!」「つらああああああああ!」剣を水平に構え……

受け止める！

爆音と共に、異常な衝撃が走る。「うおおおおおおおおお！」剣の腹に衝突した光線は、殺意に狂ったかの様な勢いだった。肩が悲鳴を上げる。「逃げろ！僕の事はいい！」「良くねえっ！」目を丸くしている先輩に、俺は力の限りに叫んだ。「あんたが信念を曲げなかつた様に、俺は俺の信念を曲げねえ！」「何を…」「俺は何を成すにも犠牲を良しとはしない！！俺の手が届く限り、俺は誰も犠牲にならない一手を探し続ける！！それが俺の信念だ！でなきや俺は…」何を成したかつたのか分からぬが、あの男は確かに母さんを犠牲にした。

「この世で最も嫌いな奴と同じになつちまうー俺が強くなり、あんたが死ななきやなんねえ定めなら！」剣が軋む。が、光線も少しずつ細くなつていて。「その定めとやら、俺がねじ曲げてやるー」とうとうビビが入る。あと少し…頼む！「いけええええええ！」剣が折れる。僅かな光線は、軌道をほんの少しづラし、床を焼いた。「…はあ…はあ…はあ…」「…君は…本当に…！」「まだ取り返してないですからね。38敗分。死に逃げなんて勘弁ですよ」「…はは。生きたくなつたよ。100にするまで。」「…ははっ！ま。とりあえず今回は俺の勝ちつて事で。止め、刺します。」「お手柔らかに頼むよー。」ちょっと、明るくなつた先輩を見て。これからがちょっと楽しみになつてきていた。

それなのに。

プレパレイショナルームを出た直後。爆音と共に、プレパレイショナルームのうちの一つが爆発した。俺達が駆けつけた頃にはもう、手遅れだった。

先輩の墓の前で、姿すら見せない卑怯者のいる……空に向かって、吼える。

「覚えとけよ……いつまでも手前の思い通りになんかならねえ……俺は月の精靈も、楔も！両方救つて手前を殺す！！」誰に届くわけでもなく、俺の言葉は夕焼けに吸い込まれていった。

1・5章／カコノカケラ クロウ／＼・＼・「我儘」

それから数日がたつた。稀代のカリスマの事故死は、大騒動となり、査問部は最後に戦っていた俺が犯人だ！と騒ぎ立てたが、フーリイを始めとする仲間たちは口を揃え反論。証拠不十分で不起訴になつた俺は、その日の戦闘演習でジンに大敗。心配するフーリイの声を無視して、寮の自室に帰つてきていた。

「何やつてんだよ……俺はっ！」フーリイに当たり散らすのはお門違い……ジンに負けたのは俺が弱いからで。ノワール先輩が死んだのも俺の詰めが甘かつたからで。「……クソッ！」俺は……弱い。フーリイに当たり散らすこの心も、ルウナ達に頼らなければ誰も救えないこの力も。

その三階上……女子一年階の同じ部屋では、二人でお茶を飲む姿があつた。藍色の髪を垂らし、膝を抱える少女の話を、銀をそのまま糸にしたかのような美しい銀髪に赤い眼の少女が静かに耳を傾けていた。「……クロウ……どうしちやつたのかな……。」「……フーリイは……本当に好きなんだね、クロウが……」優しく微笑む銀髪の少女に、フーリイは頬を朱に染めた。「……も、もう。ブランは……本当に悩んでるんだよ？」「……人の為に悩めるのは、素敵なこと。大いに悩むといいよ……」そういうつて、ブランは紅茶を飲み干した。「……ね……聞いて良いかな……？」「……？」「……精霊憑きって……辛い？」クロウと同じ、赤い目。精霊憑きの証が揺れた。「……辛い。異端は、恐怖の対象。私は化け物扱いだつた。クロウがどうか、分からぬけど……」
「……そつか。ゴメンね、辛い事思い出させて。」ブランは黙つて首を横に振つた。気にするな、と言いたげに。「……はあ……」クロウは、自分の事を明かそうとはしない。特に過去について、一言も喋つてはくれない。彼の曲げない信念……犠牲による死を何より嫌う

クロウの流儀は、そのブラックボックスから来ていると思えてならない。…知りたい、と

思つのは私のワガママだろうか。「難しいなあ……」「…行く……？」
「へつ？」「…クロウの部屋…」「…は…？」「…時には強引な…」
アプローチ…」「…いやいや、でもほらアレだよ…えーと…そつ
だ、寮長！異性の部屋は侵入禁止だから、見つかつたら…」「…そ
れは違う…男子が女子の部屋に行くのは…禁止…でも、逆は禁止と
明記していない…生徒会則4章3節…」「う…」「…ほら…行く…」
「でも…んにやつ…？」プランがフーリイの後ろ襟をつかんでいた。
そのままずるずると引きずつていぐ。「ちよつ…プラン…」

「…………」静寂。黙考数時間。その時間感覚すら無い。全て…
無駄だったのか…結局俺のやつている事はあの男と同じ。強くなる、
という目的で、ノワール先輩を踏み台にした。太陽の精靈の攻撃が
1発で終わるわけが無かったのだ。見殺しにしたも同然。「…」
俺は…」あのとき…母親を失い、その犯人扱いされ、死刑にされ
かけたあの時。俺が「生きたい」と思わなければ…大人しく死刑を
受けていれば…。どんどん自分が嫌になる。その時だった。

コンコンコン、とノックの音がした。時計をみると、11時。この
時間だと寮長だろう。面倒で寝たふりをする。「…………」「…」
開けてよ。そこに居るでしょ。」「…つ…？」声を上げそうになつ
た。フーリイの声だ。無視されて怒つて居るのか、俺の変化を感じ
て来たのか。どちらにせよこんな時間に来るなんて。「…入るよ
？」いつも寝る前にかけるため、今カギはかけていない。廊下の光
が俺を照らした。「…クロウ…電気、つけるね。」まるで人と会
話しているかのような口調。俺は俯き、何もいえずにいるの？。「…」
んしょ。」テーブルを挟むのではなく、わざわざ隣に座ってきたフ
ーリイは、ティー波特をとりだし、カップを2つ満たした。「…」
「…………」ふわっと香る紅茶の匂い。沈黙を破り、呟く。「…

……どうして……」「？」カツプを両手で大事そうに持ちながら、首を傾げるフーリイ。「どうして……来たんだ……？俺の部屋に。」「いまでずっと一緒にいた彼女には、いささか失礼だとも思った。「……心配だったんだ。最近ふさぎ込んでるし、不調だしさ。」「……ああ……」「教えて……くれないかな。」「…………」「クロウが何を背負つていて……何がク

ロウをそこまでさせるのか。」「嫌だ。」「どうして？」「……それだけは……駄目だ……絶対に。」「だから、どうしてよ！？」フーリイが声を荒げる。「……何も言えなくなつた。怖い。俺の過去を明かして変わる友人達の、俺をなじる視線。「……ねえ！」「…………」「教えてよ……つ！」あるいは、この……優しすぎる親友を信じて、話すのもいい。だが、この3年間連れ添つた大切な人を、俺の過去を話して、友情が離れる事が……恐ろしい。それはあつという間に他者に広がり、俺はあるの村の……“英雄殺し”に戻つてしまつ。なのに「……話してくれるまで、ここを動かないよ。」「…………」「力になりたいの……！」「……無理だ。」「でも……！」そこでとうとう吐いた。「怖いんだよ！俺の過去は……信念は……その根本は、簡単に人に変えちまう！こつちに住んで、お前が……一人で居ようとした俺に……人と関わる事を諦めた俺に！もう一度“周りに人がいる”環境を……暖かみをくれた！今は……今だけはこの暖かみに居たいんだよ……。」学園を出たら、父親を探し、殺す……そして自分も死ぬ。今しかない温もり。我儘と分かっていても、そこに浸つっていたかつた。「だから……言

えない……。」フーリイは唇を噛んで、俺を見つめていた。顔を伏せ、言つ。「今日は帰つてくれ。」フーリイが、ゆっくりと立ち上がつた。「ごめ……

バチン！――

「バカっ！」頬が熱い。何が起きたか分からず、フーリイを見上げた。泣いている…？「どうしてよっ！？どうして私がクロウを嫌いになるの！？クロウが今まで過去を話した人と私達は一緒なのッ！」
「…………。」硝子の窓が割れるかのような、大きな音をたてて、俺の中の…“何か”が砕け散った。「何か言ってよ…ねえっ！！」「…違う。」「なら…！」尚も俺に声をかけようとするフーリイを制するように言う。「お前らは、今までの奴らとは違う。上辺だけじゃなくて、ホントに俺の…大事な仲間なんだよ。」「…………。」「忘れてたぜ…仲間に隠し事して、信頼してもらおうなんざ…それこそ我が儘、って奴だ。」「じ、じゃあ…」見る間明るくなるフーリイの顔。空回りしていた自分にきづき、また助けてもらっちゃつたな…と心の中で呟く。「長くなるからな。最後まで付き合えよ。」夜はまだ長い。俺は、パンドラの箱を開けた…

山間の村、トラジティア。幾重の山に囲まれた、最も空に近い町。俺の両親は、魔人を討伐したのち、都会の喧騒から逃れるために友人の紹介でこの辺境の地に移り住んだ。『紅蓮の双刃』とよばれた七英雄の一人で、この村一番の名家の出身、グレン・ライトに紹介された小さな家。そこでドープ・ディマンシュという少年が生まれた。

父親の鋭い顔立ちと、母親の丸く優しい顔立ちの良いとこどりをしたような大変整った顔の少年。だが、彼には欠けた物があった。それは生まれて初めて目を開けた時、両親を大変驚かせた。

吸い込まれそうな漆黒の目。神に見放された、魔力のない人間……欠落人の証だった。

だから、彼は虐めにあつた。同年代には後ろ指を指され、石をなげられ、挙げ句魔法の試し撃ちの的にされた。だが彼の心は強く、折れなかつた。日々剣技を磨いた。近くの山の封鎖フェンスを乗り越え、魔物を相手に死ぬか生きるかのギリギリのラインを歩き、あつという間に虐めた子供達を見返した。

次に待つていたのは、無視。彼の声に答えたのは、彼の両親とたつた一人例外だった少女だった。

「こらーつー！止まれーつー！」「断る。」木造のボロッちい校舎を駆け抜ける。「待ちなさいってば！」一日魔法書にかじりついてるもやし共に体力で劣る訳がない。校庭で止まり振り返ると、肩で息をする少女が俺を睨みつけた。「ドープ……はあ……アンタ今日掃除当番だから……はあ……教室きて……はあ……」大げさな奴だ。屋上から二階降りてきただけだというのに。「入つても無い教室を掃除？馬鹿じ

やねえの？」「そもそもそれが間違ってるのよー」この村の住人なん

だから、村の学校にきて、授業を受けなさいよ。」「本当に馬鹿だな。出来もない魔法の授業なんざ無駄なんだよ。」「あなたの屋上で昼寝も十分無駄でしょ！」「だから昼寝を選ぶ。当然だろ。」

本当は寝てなんかない。時々様子を見にくるこいつ対策に背格好の似た人形を置き、山に登り剣の修行をしているのだが。「選ぶ権利なんか無いわよー子供みたいな事言つてんじやないわ！」「子供でいいね。俺に構うな。」「嫌よ。私は村長の孫、コレイ・ライト

！この名と誇りに賭けて、風紀に欠ける人間を放つておく訳には行かないわ！」「知るか。忙しいんだよ。」「う、撃つわよー」「踵を返し自宅へ向かって

いく。アイツと俺の家は真逆方向なので校門さえぐぐつてしまえばこっちの物だ。」「ファイアーボール！」「げっ！」「火炎魔法の基礎基本を忠実に守つた読みやすい軌道。左右にステップしてかわし、校門までストレートにダッシュ。マジで撃つて来たな、と今更思いながら校門を駆け抜けた。人の目の無い裏道を抜け、我が家の庭にでると花に水をやる母が笑っていた。「前から入つてくれればいいのに。」「またコレイの奴が追い回して来てさ。」「いいながらドアに手をかける。「あらあら。それで…」「そうなんだよ…」ぐつと扉を押しながら玄関の扉を押しながら振り返る。「ウチに来てるのね。」へー。うちにねえ。開いた扉の先に、鬼の形相でたつコレイ。「母さんのバカッ！」一瞬で踵を返すも、がつしりと襟をつかまれた。裏道に回つた時間で追い抜かれていたようだ。「放せよ！」「嫌」「は・な・せ！」「嫌ですー。」意地悪い笑みを浮かべるコレイ。家で捕まるのは今までに無いパターンだ。「さあ！学校に戻るわよー」「何しに？」「掃除しに！」ずりずりと引きずられていいく。「行つてらっしゃーい。夕飯までには帰つてきなさいねー。

「

「…………」「～」「～」嬉しそうに俺を引きずるコレイ。魔力で筋力を補強しているのか、普通には抜けられそうにない。腕を切り落してもいいが、後が怖い。「お前、なんで俺に絡むわけ？ウザいんだけど。」「ちよ…ウザつ…て…」「ああ。超絶ウザい。ウザい界に燐然とその名を連ねるウザさの伝道師。」「そこまで！？」「だからさ、俺に関わらないでくれ」「嫌です。」「なんで。まさか村長のくだりなんたら言つつもりじゃないよな？」「うー……」見上げたコレイの顔は見事に固まっていた。タイトルをつけるなら…「ＨＥ 図星だな。」「うるさーい！」「あんなあ。人の嫌がる事をするのがお前の誇りか？」「う…」「人を引きずりまわすのがお前の誇りか？」「うつつ！」「平穏な生活を望んでる人間の周りでウザつたく騒ぎ立てるのがお前の誇りなのか？」「…………」「…分かったら放せよ。俺は家族以外に関わりを持つ気は無い。」スッと力が抜け、俺は解放された。「それから。」「？」「俺を尾行するのも止める。」「なんで……？！」「バレてないとと思ったのか？」「それは…」「お前撒くのに時間使いたく無いんだよ。俺は忙しいんだ。」「じ…じ

やあ」「…なんだよ」「どこに行つてるのよ。毎日毎日！あんな下手くそな人形なんかに騙されるわけないでしょ！？」「それは…」今度は俺が言いよどむ番だつた。俺が修行を重ねるクラッキン山は侵入禁止区域だ。魔物がうようよいる為、フェンスがかけてあるのを無視して乗り越えている…なんて言えない。「…教える義理なんて無いぜ。じゃあな。」結局教室の掃除もせず、俺は家に向かった。コレイが追いかけてくることは、無かつた。

その夜……

私は、広間に呼ばれた時から嫌な予感がしていた。「コレイ。」「はい、お母様。」「貴方、またあの子と話していただけます。」「

…はい。」来た。予想通りの質問。私は名家の娘。欠落人と付き合うなんて如何なことかと、そう言われる。が、今日は何かが違つた。お婆様が居ない。お婆様は私の父グレンの紹介で来た、と名乗つたデイマンシユ夫妻を鬱陶しく思つてゐる。グレンは未だ魔人退治以来帰つて来ていなか、デイマンシユ夫妻は行き先を知つてて黙つてゐるのだから。村に迎えてやつた恩をこんな形で返されるとは！と憤慨してゐたのを覚えてゐる。グレンは大事な跡継ぎだから、お婆様としては早く連れ帰りたいのだろう。一度ドープに直接聞いたが、「知らないし、知つても言わない。」と一蹴されてしまつた。「ちよつと貴方に調べて欲しい事があるの。」「…？」何でしようか？」「最近、クラッキン山のフェンスの上に泥…靴の跡がついているのが見つかったの。魔物も気がたつてゐる様だし…あの子、最近めきめきと剣の腕を上げてゐるそうね？」「…？」お母様の言わんとする所が理解できた。つまりドープは、あのボロ人形を身代わりに置いてゐる

間、クラッキン山に登り、魔物相手に剣の修行を…？「貴方はいつも通り、あの子の尾行を続けなさい。まだ行き先が掴めて無いんでしょ？」「…！？」お母様まで…どうして…！？」お母様は微笑を浮かべた。「私としても、グレンの親友の子には生きて欲しいからね。例え欠落人でも。よろしくね。」「…うん！」

「ショウウカ！ショウウカはいるかい？」お婆様の声だ。お母様を探している。「明日は学校を休める様に通しておいたわ。なんとしても突き止めて。子供があんな所に入るのは危険だわ。」「はい。」「ショウウカ！今帰つたよ！」「さ、もう寝なさい。…はい、お母様！ショウウカはここに居りますわ！」

お母様はバタバタと玄関へ向かつていつた。誰も居なくなつた広間から自分の部屋へ戻ると、窓の外から村が一望できる。隅にある…まるでクラスでのドープの位置を暗示してゐるかのような位置にある、ドープの家。（…嘘だよね…？…そんな…危ない事…してないよね…？ドープ…）

「……。」「いつものように誰よりも朝早く起き、誰よりも早く学校に着く。人形をセットし、学校の裏へ。」「……。」「足音が一つ多い。犯人も検討がつく。言おうか。言つまいか。いつものように黙つて撒いてしまうのがいいか。」「早いな。こんな時間に。」「……？」

「透明になれても、足音や気配は消せないぜ。」観念したのか、空気が歪み、クレイが現れた。「いつから気づいてた?」「人形を置いた帰りあたりで空気に違和感を感じた。」「……そう。」「何の用だ?俺には構わないでほしいんだが。」「……そうだよね……ごめん。教室……かえるね。」「……」いやにあっさり引いた。とぼとぼと歩いていく華奢な背中に、僅かな心の痛みを感じた。これが最後のつもりだったのだろうか。もはや知るよしも無い。これでとうとう、家族以外に俺に話しかけて来る奴は居ないのだから。俺は学校の裏の林を抜け、なるべく人の通らない道を通り、クラッキン山道の入り口のフェンス前にやってきた。近くの木に登り、軽々フェンスを乗り越えた所で、周りを確認しなかつたことに気づく。（浮かれちやダメだ。気を引き締めろ！）自分自身を叱咤し、改めて確認する。ここで見つかった

ら言い訳が聞かないでの、フェンス前から目視できなくなるまで猛ダッシュ。荒い山道故足が痛む。「ここまでくれば……」いつもの目印にしている岩にたどり着く。ここからは周囲に警戒しなければ。父のお古のツーハンドソードに手をかけながら、ゆっくり歩いていく。最近は七合ぐらいまでなら平氣で登れるようになってきた。東西南北の4つに分け、毎日ポイントを変えて狩りを行う。今日はまだ行つていない南側六合田……ちょうど村から反対側へ向けて、俺は歩き出した。

「はあ……はあ……」心臓が飛び出るかと思つた。ドープは周りを確認したと思つた直後、ダッシュで離れて行つたから、バレた！と思わずにはいられなかつた。私はドープに追い返された。のは、私が見せた幻影だ。私はこうしてフェンス前の木の上で息を潜めていたのだ。ついでに透明化だけでなく、気配消しの魔法もかけた。完璧な計画だと思つたのに。木の上を伝つて追いかけるが、地上を走るドープには追いつけない。「くつわお……」何時の間にか背も、足の速さも抜かれてしまつた。彼は自分のずっと前にいる。自分の道を貫く力が違う。「……？」と、思ったその時、急に勢いを緩めた。急ブレーキの慣性で枝から落ちそうになる。「何……？」ドープは数秒停止した後、剣の柄に手をかけたながら、ゆっくりと歩き出した。これなら追いやすい。ここまで諦めずに追いかけた自分をちょこつとほめながら、音をたてない様に枝を伝つ。「ふうん……」特に何も起きない。ドープがこの山に入つているのは分かつたものの、本当に危険な修行なのか……？私はまだ、諦められずにいた。どこか生に執着しない面のあるドープでも、こんな事までして強くなりたがらない。そう思

いたかつた。4合、5合と登つていいくうち、この山に特別な何があるんじやないか。と思い始めた。それならあの剣は自衛のため。

いさわか自分に都合のいい解釈だが、いまはこれでいいとおもつた。

「ふう。」もうすぐ、南側6合の辺りだ。7合から見下した時、開けた場所が見えた。取り合えずばそこを目指して、歩く。今日はやけに襲われないな、と思い始めた。いつもならもう2、3回は交戦している地点だ。まあ、強い奴と集中して戦えるのは良いことだと、一人で勝手に納得する。「お。」目の前に開けた平地が見える。鬱蒼とした木が途切れる。円形の平地には、石像が2つ、並んで転

がっていた。鞄からオニギリを取り出し、頬張る。「ははからはんもふつへへえははなあ（朝から何も食つてねえからなあ）」呑気だな、と思いつつ、ここならどの方向から襲われても余裕をもつて対処出来ると思い、オニギリの残りを口に放り込む。そう。完全に、油断してた。「ドープ後ろツ！！」聞き覚えのある声。後ろを振り向くと、石像が大きな得物を、今振り下ろす所だった。

「フレイムライフル」つー「私の今ある魔法の中で一番早い魔法を放つ。石像の上側に当たった火の波動は、石像の武器の軌道を僅かに逸らした。ドープの頭に重い一撃を入れるはずだった石の鈍器は、右肩に入る。ついでに木から飛び降り、ドープの後ろに立つ。「大丈夫!?」「!?」慌ててバックステップをとり、ドープが私と並ぶ。「…お前…何しに…」「何しにじやないわよ!油断して後ろ取られて!馬つ鹿じゃないの!?」「お前こそなにしゃしゃり出てきてやがんだよ!帰れ…つつても帰り襲われたら…ああくそ!とりあえずそつから動くなよ!」「う、うん。」あたしはドープの気迫に押され、思わず頷いた。ドープは上体を倒し、地面すれすれに大きな剣を地面と平行に構えた。お婆様の稽古の付き合いで様々な武術を見てきたが、あんな構えは見たことが無い。大剣は重量があるため、普通なら上段寄りに刀身を立てて構えるのがセオリーだ。あんな構えでは剣を持ち上げる分力がかかる。彼の父でさえ、肩に担いではいるものの上段のスタンスは崩さなかつた。ドープの構えは、はつきりいつて無茶苦茶だ。「ああああああああ!」右側の赤紫の石像がおおきなメイスを振り上げる。刹那、ドープの姿が…「消えた…!?

違う。赤紫の石像の向こう、大上段に剣を振り上げる姿があつた。「…つらあああ!」全体重を乗せた一撃が、赤紫の石像を半分に叩き割つた。あつという間に崩れ、瓦礫に変貌する。しかし、もう一體・青紫の石像が、石刀を袈裟切りで振り下ろす寸前だつた。身を捻るようにかわし、すれすれの所を石刀が唸りをあげて抜けていつた。「つと!」「がああああつ!」ところがこの石像、自分の武器の特性が分かつてゐるのか、振り下ろした剣の起動を90度変えて、剣の腹でドープの頭を殴打した。「があああおお!」「がつ…ぐあ…!」流血で見るも無残なドープの顔。避けようと体を捻つ

た無理な体制のまま、強引に武器を振り上げた。「調子に…乗るなあつ！」青紫の石像は倒れる様にして逆袈裟をかわし、再び攻撃モーションに入った。「せやああああああ！」逆袈裟で振り上げられた剣を振り下ろすドープと、青紫の石像の攻撃が交錯した。激しい鍔迫り合い。力こそ石像の方が強いものの、上手い角度で鍔迫り合いに入ったため、ドープの力でも十分渡り合える様だ。力は均衡し、どちらも動かない状況だった。今ならいける！」「フレア・トマホーク！」急角度で上に登った火炎弾は、逆二字を描き、急降下で青紫の石像の頭を貫いた。一撃で粉碎された青紫の石像は瓦礫に変わり、力の行き場を失つたドープは、その場に倒れ込んだ。

「ふう…」「ふう…じゃないわよッ！」「あー…あれだ…何でここに居やがんだこの馬鹿！」「はあつ…？あんた私がいなかつたら死んでたのよ…？礼を言いなさいよ！」「俺一人でも楽勝だつたつてーの！」「なによそれつ…？最つ低ーー！」二人は睨み合つたあと、ふんつ、と互いにそっぽを向いた。ふと、2つの瓦礫から、それぞれ一つの欠片がふわり、と浮かび、空中で静止した。「…おい。」「…なによ。」次の瞬間、まるで欠片に呼び集められたかの様に、瓦礫は欠片に集まり、元の…一体の石像に戻つていった。「…嘘…」「があああああつ！」ステレオで2つの石像が吼えた。「再生能力だわ！聖属性の魔法がないと…」「…」炎魔法だけに特化したユレイは聖属性の魔法を習得していない。この場に聖属性の魔法を持つ者はいない、といつことになる。が…「…」「ち…ちょっと…聞いてんの！？」ゆつくりと剣を構える。「呼んでる…」「あつ…？」「聞こえるんだよ…？」「…」この倒し方：助けてつて声が。「…どうとう頭がおかしくなつた、と思われたかもしない。小さなこの声は、俺にしか聞こえていないのだろうか？

助けて

大剣を大きく引き、突きの構えを取る。「……「風銛閃」！」走る勢いと身体のバネを伸ばしきる力、全体重を乗せた必殺の一撃が、赤石像の右肩を粉碎した。風が吹きすぎ、そのまま赤石像を飛ばした。大木に激突。身体が伸びきった隙だらけの姿勢を狙つて、青石像が石刀を振り上げた。「つらあ！」大剣を地面に思い切り叩きつけ、刺す。そこを支点に、柄を鉄棒のようにして、飛ぶ。ジャンプの頂点で剣を引き抜き、がら空きの頭上を取つた。「「兜断翔」」バットの様に、全力で振り抜かれた大剣は、文字通り相手の兜の無い頭を真つ二つに切つた。そのまま背後に着地し、振り返り一閃。青石像は、まるでハンマーで氷を叩いたかのように爆散した。「つしゃ……とどめ……ッ！」先ほどと同じ、瓦礫と化した青石像に向かつて、思いつきり剣を振り上げた。「でやあああああ！」瓦礫のうちの一欠片に狙いを定め、思いつきり振り下ろした。それは先刻初めに浮かび、他の欠片を呼んだ、核となる欠片。これを壊さなければ、戦いは終わらない、というわけだ。核を壊された青石像の瓦礫は、煙に変わり、天にのぼつて霧散した。「……聖属性無しで……倒した？！」「つしゃ、

次イツ！」再度を引き、風銛閃の構えを取る。片腕の無い赤石像の頭に、狙いを定めた。上手く立てない赤石像は、じたばたともがいていた。「今出してやる……風銛閃！」急接近し、一突き。上半身を吹き飛ばした一撃で瓦礫に変わる赤石像に、最小限のモーションでとどめを刺す。「はあ……はあ……つ……！」「凄い……」《……ありがとう……》「よかつたな……出られて。」《魔力を含まない攻撃で核を攻撃。無理難題だと思つていました。人間は無意識の内に魔力を武器に流してしまいますから。》「“欠落人”だからな。もとより魔力が無いんだ。込めようがない。」《……？！……それでは今の剣技は……！？」「……さあ？」《さあ……つて……キミ面白いね。》目に見えない何かとの会話。ユレイからすれば、さぞ奇妙な光景だ

る。『ねえ…モノは相談なんだけど…』「…ん?」『私達をキミの心に住まわせてくれないかな。』「…つまり? ? ?」『キミに、元ボク達の魔法を使えるようにしてあげる。そのかわり、お願ひしたいことがあるんだ。』「…」おもわず、息を飲んだ。魔法が使える? この俺が…? 「…良いぜ。どうすればいい?」声が震えた。

『…目を閉じ

て、じつとしてて。』「……。」身体が、暖かい。仄かな熱に浸かっているかのような感覚。『我は月、闇に染まる一縷の光を纏う者。契りを交わし、能力を授けん。』『我は月、闇を払い包む靈光を纏う者。契りを交わし、能力を授けん。』見えない一人の声が、頭の中で反響する。身体を包む熱が更に熱くなる。狂おしいほどに。次の瞬間、『……契約! !』重なる声と共に、身体の熱が爆散し、確かに力が俺の中にあるのが感じられた。『……ど…ドープ…?』『帰ろう。なんか、疲れた。』剣技を使わないと倒せない敵なんて久々で、体力を使つたのは事実。それより帰つて報告したい、というのが正直な気持ちだったが。『ドープ? ! その…目どうしたの?』『…目?』『君は欠落人から精靈憑きに変わったんだ。私達が君の精神世界に住んでる影響で、君の黒目が赤くなつてるはず。彼女はそれに驚いてるんだと思うよ。』頭の中で声が響く。『…俺が欠落人じゃなくなつた証、らしいぜ。』「…? 欠落人じゃなくなつた…つて…?」焦つてているのか…いじめの対象が、その理由が消失しようとしているのだから。『良いから帰るぞ。俺の後ろ5歩をぴつたりつ

いて來い。』「……」

「…………」どれくらい歩いただろ? 一度の戦闘どころか、一言の会話すらなく、だいぶ歩いた。出口のフロアまで後少しの所で、ドープが止まつた。「後は勝手に帰れ。」そう言つて、また歩き出した。「え…」「一度とこんな事するなよ。」「ち、ちょっと

と…」そこで…明らかに嫌そうな顔で足をとめ、振り返った。「…あなたに止めるように言いに来たの。危ないから…」「…やつぱりな。じきに見つかると思った。」「お願ひ。もうこんなことしないで。」「…本当に“危ないから”なのか?」「…え…」「俺を散々虐げてきてなにいつてんだ、ってことだ。俺が死ぬ、万々歳じやねえか。」「そんなこと…」「もう一度、言つぞ。俺の後をつけのを止め。というか、俺に関わるんじゃない。」そう言つて、ドープはフェンスを飛び越えた。

「ただいま。母さん。」剣を壁にかけ、母さんの正面にすわると、母さんがグイツ、と顔を近づけてきた。「…………」「か、母さん…ちゃんと説明するから…」「…精霊憑きになつたのね。ドープ。」離れていく母さんの日微笑。「え…?」「ふふ…母さん、これでも世界中を旅してゐのよ?精霊憑きの目が赤い事くらい分かるわ。」「母さん…」「おめでとう。ドープ。…精霊さん、私の声が聞こえるかしら?」《聞こえます…とお伝え下さい。もう少し慣れれば、声を自由に出せると思ひますので。》「聞こえる、つて。ちよつと今は喋れないみたいだけど」「ドープと一緒に…戦つてあげてくださいな。ちょっと複雑な子だけど、良い子だから。…それから、ありがとう。ドープと契約してくれて。」《そんなコトないよ。むしろ礼を言わなきゃいけないのはボク達の方で…》「えつと…」「聞こえたわ。綺麗な声が…達、つてことは何人かいるのね…ふふ…本当に良かつたわ!」テーブルをまわり、俺に抱きついてきた。「母さん…」「よかつたね…ドープ…」「…うん。」俺は泣いた。声も音も無く、ほんの少しだけ。物音…玄関の開く音で、母さんは俺から離れ、父さんを迎えていった。「おかえ…」母さんが言えたのは、そこまで。父さんが今まで見たことのない鬼のよつな形相で、母さんの首を掴んでいたからだ。「…死ねツ…」「…か…つは…」「母さんツ

！」慌てて父さんの太い腕につかみかかつた。「止めてよ…父さん…！」「邪魔を…するなつ…！」壁際まで吹つ飛ばされ、後頭部にひどい痛みを受ける。「ドープ…つか…はあつ…」「止め…やめろおおおおお…」初めて、魔力を使った。足から噴き出した紫の魔力が、急速のタックルを生んだ。父さんの体が窓を突き抜け、庭の外へ飛んでいった。激しく咳き込む母さんに手を貸し立たせると、父さんと母さんの間に入るよつに立つた。「どうしたんだよ父さん！？」「じけ…ドープ、お前まで殺したくない…だが、邪魔をするなら…」「あらうことか、父さんは大剣を構えた。肩に担ぎ、やや前に傾いた重心で左足を半歩前へ置くスタイル。《マスター》。決断が遅れると命取りです。あの人…マスターのお父様から本物の殺氣を感じます。》「分かつてるよ…」ちょうど背中の辺りにあつた大剣を取る。まだ手入れしてない上、石像を相手にしていたため、打ち合つのは危険だ。何より、実の父親…伝説の魔人を討つた、世界の知る大英雄。プレッシャーに心臓を握られた感覚だ。「…ちゃんと説明してよ…父さん…！」「じけ…退いてくれ…ドープ…」「…母さんは逃げて。俺がどうにか説得する。」「ドープ…そいつは××××××！」「××××××××××××？」「××××××××××××

××××××

そこで、記憶は飛ぶ。あのあと、母さんは逃げて。あの男と俺は家の中で戦つた。途中で剣が折れ、気絶させられた。ルウナ達がすぐ起こしてくれて、あの男を追つた。漠然と覚えてはいるのだが、思い出せない。そして、クラッキン山に登る。そして、母さんは殺された。

「……」「……」カップからは湯気が消え、外からは闇は消え、私達から言葉が消えた。クロウの目が、不安げに揺れている気がした。…クロウ・ナイトサイドは、ルウナ達に貰つた名前なんだ。

親父が付けた名前今までいるのが嫌だつたし、英雄殺しとして探し回られるとと思つたからな。」「じゃあ…コレイちゃんは…」「俺を村に連れ戻すのが目的だろうな。待つてるのは処刑場だが。」「…」「大丈夫。あいつには負けねえし、負けても居なくなつたりしないよ。」いつもの…私の大好きな、屈託のない笑顔。「なんか吹つ切れたぜ。ありがとな。フーリイ。」「ううん。いいの。クロウを知れて良かつた。今日は帰るね」「ああ。また後でな。」「うん！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3101q/>

月の復讐者 魔法学園編

2011年10月8日14時50分発行